

台湾史から見たROC体制打倒の条理

国立台湾師範大学教授・中央研究院近代史研究所研究員

林明德



講義中の林明德先生
(平成17年11月1日)

本稿は平成十七年十一月一日、第三回台湾李登輝学校研修における日本語による講義「台湾の主体性の追求」の要点筆記である。

(文責＝編集部)

台湾人が抱いた漢民族への誤った幻想

「台湾の主体性」というのは、裏を返せば「台湾独立」ということである。しかしそう言ってしまうと、アメリカや日本からいろいろと文句が出るので、「台湾の主体性の追求」という言い方をしている。

私達は日本時代の教育を受けたが、ある人によれば、この統治は完全に成功したという。しかし客観的に見ると、プラス面もマイナス面もある。日本の植民地経営は確かに利益優先ではあったが、欧州のそれとは異なる面もあった。

そのあたりは、最近の中学の教科書『認識台湾』でも述べられている。そこでは初期、あるいはその後の抗日運動のこ

と、皇民化運動が施行されたことなどを記載する一方、台湾の発展についても客観的かつ公平に書かれている。

例えば、土地制度の変革、貨幣の統一、交通や上下水道の整備、農業の近代化、特に蓬莱米の開発などである。また、東南アジア最大の灌漑施設である八田與一の嘉南大圳、烏山頭ダムなどで、これは台湾の農業発展に大きく貢献した。それから新渡戸稲造による製糖産業、その他にも教育の普及や社会教育による日本語教育などがある。

もちろん別の面もあった。当時の政治は警察政治ともいえるもので、江戸時代の五人組のような制度で台湾人を監視した。反面、時間や法規の遵守、衛生概念の徹底、政治改革。また、初歩的ではあるが台湾に自治や選挙も導入した。

台湾人の中にアイデンティティが興ったのは、この日本時代になってからのことである。

台湾の独立王朝だった鄭王朝時代には、台湾人というアイ

デンティティはまだ興っていない。当時の統治は国民党政府の独裁、特務政治と同じパターンである。国民党政府は鄭成功を民族的英雄としていたが、はなはだ疑問だ。大陸反攻を目指し、台湾では高圧的な統治手法をとり、台湾自体の開発はしなかったのだから、台湾人というアイデンティティは押さえつけられていた。

日本統治時代に入った当初、台湾民主国ができたが、このとき台湾人は本当の「台湾人のアイデンティティ」を求めたのではなかった。それはあくまで清を意識したものだ。だから自らを「台湾人」と自覚したのは、日本統治が始まってからということになる。

確かに一部の台湾人は台湾の独立を叫んで抗日ゲリラになり、南北に展開して連帯を深め、台湾人意識を持った。ただ、このときの台湾人意識は「日本人」に対するものであり、まだ漢民族との絆は断ち切れておらず、台湾人はなお、漢民族に対する誤った幻想を持ち続けていたのである。

茨の道を歩んだ台湾人の戦後

中国人の統治には、清時代の二百年と国民党政府の六十年

林^{りん}明^{めい}徳^{とく} 一九三二年、台湾・台北生まれ。一九六六年に来日し東京大学博士課程修了。文学博士。現在、国立台湾師範大学教授・中央研究院近代史研究所研究員。

がある。それと、日本人統治の五十年。いずれも外来政権だが、それらのどちらが良かったかと、台湾人は二者択一で考える。もちろんその結果は明らかだ。

張徳水という作家に『激動！台湾の歴史は語り続ける』という著書がある。第二次世界大戦の終戦で、日本に留学していた台湾人が多数帰国してきたが、彼もその一人だった。台湾は終戦という変わり目で大きなショックを受けた。当時、彼の母親はこう言ったという、「清国時代に戻ったのだよ」と。つまり、近代的な社会から封建的な社会に戻ったのだというのである。また、村の人達は「豚どもが豚小屋から出てきた」と罵る言葉さえ口にした。それはなぜかと言えば、製糖工場やその宿舎を見ればすぐ分かる。日本時代は簡素ではあったがいつも清潔だった。しかし、中国人が来て入れ替わると、数ヶ月で汚らわしい豚小屋に変わってしまったからである。

国民党という外来政権は、日本の植民地統治以上に専制的かつ絶対的で高圧的であった。当時の陳儀行政長官は、台湾総督の安藤利吉より大きな権限を持っていた。だから一年余りで二・二八事件が発生し、少なくとも二万人が殺害された。この大虐殺の残虐さは、とても語り尽し得ない。

先に述べたように、台湾人は中国に漠然とした憧れがあったので、終戦での「祖国復帰」を素直に喜んだ。だから、日

本の植民地統治に対する不平から救われた安堵感もあり、大いに歓迎もした。しかし、中国人は征服者として台湾に来たのだった。

まず、中国の軍隊が来た。それまで私は威厳がある日本の軍隊を見てきた。だから当時、基隆まで「祖国の軍隊」を見に行った私は、それを見て一気に落胆し、それまで無自覚だった「台湾人アイデンティティ」を発見した、「我々は中国人ではない」と。

台湾人の多くは大陸から来て三、四百年だが、日本による文明化を経験し、考え方も行動様式も大きく変化した。そして庶民的な感覚で、戦後やって来た中国人を「どう見ても自分たちとは違う人種」と判断できた。

とにかくそれまでの台湾人は、中国人をまったく理解していなかったといつてよい。中国人が来てから物資は欠乏し、悪性インフレとなり、秩序も悪化した。これらが一九四七年の二・二八事件につながる。その主な原因は文化の違いで、文化の高い人が、文化の低い人に統治されることになったからである。

当時、台湾の人口は約六百万人だったが、そのうち二、三万人がこの二・二八事件で虐殺された。二、三百人に一人が殺されたのである。そして、長期にわたる残酷な白色テロ、戒厳令と続く。惨めな台湾人は、主体性を求めて茨の道をした

どることになったのである。

そして、今ようやく台湾固有の歴史や風土に根ざしたアイデンティティを求める傾向が出てきて、我々も李登輝先生の主導の下、台湾人の主体性を追求している。

四百年の歴史のなかで、台湾人は一度も自分の運命や将来に関与することができず、これまで外来政権に征服されてきたが、現在は民主運動が盛んになり、ようやく台湾人としての主体性を求めるようになったのである。

誤解されている台湾の法的地位

日本はほぼ単一民族で、民族に根ざすアイデンティティかと思われるが、国家のアイデンティティの源は必ずしも民族によるものではない。政治のみによってアイデンティティを保持する場合がある。代表的なのはアメリカで、世界の百九十以上の国のうち、半分以上はアイデンティティを、民族ではなく、自由・民主主義という政治によって保持している。

しかし、台湾には先達の血と汗の努力で民主体制ができてつあり、自分たちの将来に関与できるようになると、また別の外来政権が脅威をもたらして来ている。中華人民共和国が「台湾は中国の不可分の領土」と叫んでいる。これは国難といつてよい。

なぜ我々はアイデンティティを求めるのか。それを考える

には、まずは「台湾は果たして中国の一部なのか」という疑問を解くことから始めなければならない。

これまで中国政府は台湾に一步たりとも入ったことはなく、一日たりとも統治したことはない。それにも拘らず、なぜ台湾は中国に属さなければならないのか。中国がそのように主張する根拠とは何か。

その根拠とされているのが「カイロ宣言」と「ポツダム宣言」だ。これは中国だけでなく、台湾の教科書でも、台湾の地位の説明のなかで教えている。しかし「宣言」には必ずしも法的な拘束力はない。法的拘束力を持つのは「条約」でなければならぬからである。

カイロ宣言とは、一九四三年十一月、ルーズベルト・チャーチル・蒋介石の三人の間で「台湾・澎湖のように、日本が清国から盗取した地域を中国に返還する」という、国際法をまったく無視した内容だった。下関条約は戦争の結果ではあるが「条約」であり、「盗取」というのはおかしい。

またこの宣言には、ルーズベルトチャーチル、の署名すらない。私の見る限りコミュニケ、あるいはニュース発表にすぎず、法的拘束力はない。この点は、日本も誤って解釈しているのではないか。

次に、一九四五年八月のポツダム宣言。これも「宣言」であって条約ではない。この二つの宣言は、連合国側が対日姿

勢を発表したものにすぎず、遂行責任はない。だからポツダム宣言を受諾した日本は連合軍（アメリカ）に占領されたものの、決してアメリカの領土になった訳ではない。台湾も同様に、中国のものになった訳ではないのである。

台湾の法的地位は、一九五一年のサンフランシスコ平和条約に根拠を持つ。これが下関条約以降では、台湾の法的地位に関する唯一の文書である。このサンフランシスコ平和条約で日本は台湾を放棄したが、台湾の地位は未定であり、「どの国のものか」と規定する記載は一切ない。つまり、日本が「台湾を中国に返還」したとか、台湾を「中国の領土と承認した」とするのは大きな誤解でしかない。サンフランシスコ平和条約で日本は台湾を放棄しただけで、台湾の帰属については一切触れていないのである。

しかし残念ながら、一九四五年から一九五一年の間に、国民党の台湾統治という取り返しのつかない既成事実が作り上げられてしまった。

我々も「一つの中国」には賛成だ。そして「一つの台湾」が自然だ。我々も「二つの中国」は望まない。

「ひとつひとつ」根拠のなご中国の主張

中国側のもう一つの根拠は、「台湾人の多くは、祖先が中国大陸から来た」ということである。このこと自体は否定し

ない。しかし、祖先が中国人だから台湾は中国のものであるという論理に従ったら、世界は大混乱に陥る。アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドはアングロサクソンであり、ドイツ、オーストリアはゲルマン民族である。アラビア地域は二十以上の国があるが、同じ民族だ。

中国の論理に従えば、これらの国は皆ひとつの国にならないのだからだろうか。シンガポールも中国の一部なのだろうか。

もう一步進んで言うと、台湾人は実は漢民族ではない。台湾人は過去数百年来の原住民との混血であり、原住民の血統が九〇%以上の固有の民族と言える。このことは最近、医学会のDNA研究で裏付けられている。

しかし、帰属意識、すなわち「私は台湾人であり、中国人ではない」というアイデンティティは、現時点では国民全体に定着しておらず、形成途上にある。未だに「中国人」「台湾人であり中国人」という考え方があり、これが我々の現在の悩みである。李登輝先生の目標は、この台湾人アイデンティティを七五%まで引き上げることだ。

「台湾は古より中国に属する」という説がある。しかし、そのような史実はない。例えば「十七世紀、清は台湾を統治していた」と言うが、その統治の範囲は多目に見ても西部地域の平野部、全体の三分の一ぐらいでしかない。

また、ある人は「台湾には独立王朝が築かれた歴史はない」と言う。「同じ植民地でも、朝鮮が戦後すぐ独立できたのは李氏朝鮮が存在していたからだ」と。確かに約二十年の鄭成功王朝と、百四十八日あるいは一週間という説もある台湾民主国くらいしか独立国はなかった。しかし、世界の国の半数以上は台湾と同様に、そもそも独立王朝など存在していなかった。アメリカ、カナダ、フィリピン、東チモール、いずれも独立王朝の歴史を持たずに独立している。

以上、法的根拠だけでなく、「同一民族だから」「清が領有していたから」「独立王朝の歴史がないから」という言説は、いずれも中国が台湾を領有する根拠としてはまったく成立しないのである。

不正常極まらないROC体制

今、台北に「二二八纪念馆」があり、当時の様子を伝えている。ただし、ここで伝えている内容は事件の百分の一程度で、我々はこの事件の真相、原因、責任追及を学術的に研究しているの、やがて真相が全て明らかになる日が来る。

白色テロ、戒厳令下の三十八年とはどういう時代だったのか。例えば、女子学生が「蒋介石反対」と言ったら、この五文字で十年の刑だった。つまり一文字で二年ということだ。戒厳令下における民衆の受難者は二十万人にも上る。銃殺も

一万人を超え、私の周囲の人間も半分以上が囚われた。

もう一つ、白色テロ、戒厳令下とは、台湾の文化を徹底的に排除した時代だった。台湾語も禁じられた。それは日本時代にもあったことだが、国民党政府の場合は徹底していた。

テレビも完全にコントロールされ、台湾語の番組は一週間に二回、それも三十分だけだった。英語は許されていたが、日本語は禁じられた。

このように、台湾の主体性の追求、すなわち台湾の独立とは「中華民国体制からの独立」であって、「中国からの独立」ではない。常識的に考えても、中国に属したことの無い台湾が、わざわざ中国から独立することなどありえない。

今、台湾に求められているのはまさに「正名^{せいめい}」ということとで、「中国」から「台湾」へと名前を直すことである。

ある人は「すでに台湾は独立しているのではないか」と言う。確かに台湾には政府・民衆・領土がある。外交関係も二十数カ国とある。

しかし今の台湾はROC、つまり中国共和国で、台湾でありながら「中国」を名乗っている。飛行機は「チャイナエアライン」、街には「中国石油」「中国信託」、道路は「重慶路」「南京路」、チベットや蒙古、満州の地名まである。空港も「蒋介石紀念空港」、学校の名前にも中正（蒋介石）、中山（孫文）が付き、オリンピックでは「チャイニーズ・タイ

ペイ」と呼ばれる。我々としては「ROC＝中国共和国」を「台湾」にしたらいだけなのである。

次は制憲、憲法を制定することだ。現在、政治にしても経済にしても「中華民国憲法」に則って運営されている。しかし、この中華民国憲法が施行された時点では、台湾はその施行範囲に入っていない。占領前なのだから中華民国の領土でもない。しかもこの憲法では、今の中国はもちろん、モンゴルさえも領土とされている。これは全くもって不正常な状態で、こんな憲法は世界広しと言えど、台湾にしかない。

ところで、もし台湾が中国の支配下に置かれたらどうなるか。台湾海峡だけでなくバシー海峡も中国に抑えられることになる。南シナ海は名実ともに中国の内海になる。すると、東南アジアの各国は中国に従属を強いられることになる。また、中東に至るシーレーンが抑えられるので、日本も中国への屈服を迫られることになる。

台湾と日本は運命共同体であり、将来もそうである。これは誇張した表現ではない。国交断交後も経済・文化の交流は拡大、発展している。決して日本と中国の交流にも劣らないほど密なのである。

今回来てくださった皆様には、この運命共同体である日本と台湾の関係がより親密なものとなるようご協力いただければ幸いである。